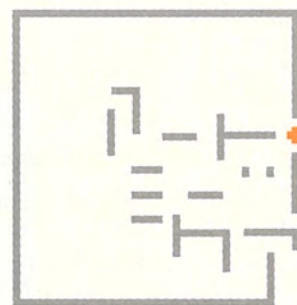




「シミも記念のうちだから」



## アートミーツケア学会 News+Letter Vol.2 2007 Autumn

### CONTENTS

特集 **哲学する写真** —写真を通してケアについて考える—

- | リレーエッセイ    ブランドビジネスへの挑戦「みくすさいだー」  柊 伸江
- | コラム            アートはこころのクスリ② NPOアーツプロジェクトの誕生    森口 ゆたか
- アートとNPO  NPO法人芸術環境計画 (ART POT)    宮嶋 一男
- | インフォメーション    入会のご案内

## 生老病死へのまなざし

綾智佳 ガalleryディレクター/The Third Gallery Aya Director

生を得た時から、それは老、病、死へとむかって動き出します。そういったことを正面から捉えた作家をふたり紹介します。

### 記憶をたどる—石内都

はじめに、石内都さんの作品を紹介します。石内都さんは、1947年生まれ、今年で60歳です。群馬に生まれ、その後すぐにお父さんのお仕事の関係で横浜に行き、子供時代、思春期を横須賀で過ごします。多摩美術大学で染織を専攻しましたが、表現について考えたとき、まず自分自身が何者であるか、自分自身を見てみよう、自分が嫌いだっただ横須賀を撮るということにしました。なぜ嫌いだっただのか、自分がそこでどうやって生活していたのかということ、写真を撮ることで思い出していきます。そして、『横須賀ストーリー』を出版しました。

自分の記憶をたどるかたちで、暮らした土地や建物を撮ってきた石内さんですが、40歳になったときに被写体を建物から人に変えました。そして、『1・9・4・7』という写真集をつくりました。『1・9・4・7』は石内さんの生まれた年です。40年生きてきた自分の体を見て、若くもなく、そして年を取っているわけでもない自分自身を、やはり考えざるを得ないと思ったそうです。そして、1947年生まれの自分と同年の女たちを訪ね歩いて、写真を撮っていきます。



©Miyako Ishiuchi [1・9・4・7#10]

石内さんは、同年代の女性の手と足を撮っている時に、「とても美しい。とてもいい」と思ったと話しています。その手と足にたまっている時間みたいなもの、すべての人が年を取るという普遍性、体の中にたまっている歴史みたいなものがあるということが見えてきたのです。

後年、『SCARS』という傷を撮ったシリーズを発表します。傷というのは、実際に傷を持っているその人にとっては、つらくて痛い思い出、大きな事件があったということになるので、ある意味思い出したくない部分でもあると思います。しかし、石内さんはその傷を見て、傷を持って今生きているということは、その傷を超えて生き延びた証明でもある、と感じたようです。石内さんが発表していくなかで、自分から傷を撮ってほしいと傷を持った人が集まってくるのが

写真は、誰にとっても記録のための身近な道具ですが、それは単なる記録ではなく、記憶を共有したり、新たな思いを想起させたり、人と人をつなぎ、世界を開いていくことができる力をもっています。ここでは、1人ひとりの物語や家族の風景、または人間の生老病死にまなざしを向けた写真を通してケアについて考えた講座、ワークショップについて報告します。まなざしを共有する、写真の可能性について提案します。

起こったようです。集まってくる人たちには、撮られるということ、むしろ自分の傷というものを受け入れようという思いがあるようです。

この作品は今も撮り続けていて、今度、女性の傷ばかりを撮った作品集というのがまとまります。乳がんで乳房を取られた傷、大きなやけどの傷、リュウマチで変形してしまった人の手など。写真集には、撮られた人の傷が、病気の傷なのか、事故の傷なのかということをおぼろげに、「illness」、あるいは「car accident」という最低限の説明だけが載っています。

次に『Mother's』という、お母さんをテーマにした作品を紹介します。石内さんは傷のシリーズを撮る延長上で、自分の母親に頼んで彼女の火傷の傷を撮りました。その写真を撮った後、すぐお母さんは亡くなってしまいます。その後、お母さんが亡くなった後に、お母さんの遺品を処分することになったとき、遺品を撮影します。お母さんが身につけていた下着や入れ歯、口紅など、それらを『Mother's』というシリーズにまとめます。石内さんはこれらをはじめは作品として発表しようと思ったわけではなく、自分のために撮っていました。発表するというよりも、撮るという行為の中でのコミュニケーションがとても重要だったようです。石内さんとお母さんのあいだには、娘と母の確執というのがずっとあったようですが、遺品を撮影するなかで、母だけではなく、お母さんの女性の部分を、見つめることができたのだと思います。



©Miyako Ishiuchi [Mother's#3]

### フォトセラピー

写真を通して自分を受け止める—ジョー・スペンス

次にジョー・スペンスの作品を紹介します。ジョー・スペンスは、人生の紆余曲折を経て、写真家になるのですが、写真を撮る場合に撮る、撮られるという関係が出てくる、写真を撮るといふことだけで、ある意味、力を持ってしまうという状況になるということが果しているのだからかということを考えていくうちに写真が撮れなくなってしまいました。

そういったなかから、撮る、撮られるという関係性をつくら

ないで写真を撮る方法として、自分自身を撮りはじめます。はじめに、家族アルバムを分析し、お母さんに成り代わってお母さんを演じて撮り始めます。ジョー・スペンスにとってはお母さんというのは、ずっと口をへへの字に曲げて、彼女のやることをずっと禁止していたイメージでした。だけど、演じてみることで、陽気なお母さんの部分も思い出していきます。そういうお母さんのイメージを自分で発見していくのです。

お母さんになりきって写真を撮る、つまり写真を媒介して自分や他者を見つめなおす方法をフォトセラピーと言いました。それをすることで母親の立場で彼女の状況とか、そうせざるを得なかったというようなさまざまなことを自分の感覚として感じることができ、だんだん両親とのあつれきというものをも自分の中で整理することができるようになっていきます。

彼女は自分が乳がんにかかったときに、フォトセラピーの手法を使って精神的な葛藤を乗り越えようと、病院でたくさんの

セルフポートレートを撮っています。がんにかかった自分の今のこの姿が他人からどのように見えるかということは、彼女にとってすごく大きな問題でした。自分の体を自分がどういうふうに見え止めるか、あるいは他人はどう受け止めるのかということ、写真を通して見せていきます。具体的なフォトセラピーの方法の一つですが、写真の前で自分自身、感情を思い切って出し、それを写真に撮るといふようなことをセッションとして行いました。



©Jo Spence

### 対談 綾智佳×播磨靖夫

**播磨** 2人の作品を見て感じるの「喪失」が共通のテーマで、それはとても現代的だと思います。欠格とか欠落とか自分たちが失ってきたもの、もう取り返しのつかないものにまなざしをむけるというのが現代的なのかなという感想を持ちました。

石内さんの作品で興味深かったのは、お母さんの形見です。お母さんを失った喪失感を癒すために形見を撮って残していく、そのプロセスの中に和解といったものをふくめて癒されていくのでしょうか。

**綾** それは絶対にあると思います。石内さんの場合は、お母さんとの確執があったようですが、お母さんが亡くなったときにすごくショックを受けました。そのような中、写真を撮ることでいなくなってしまったお母さんをもう一度見るということがあったようです。

**播磨** 2人の作家のあいだに、明らかに立場の反転があるように思います。撮る側、撮られる側の関係の話は非常に興味深く聞きました。ケアというの、一方的な関係ではなく、与え手と受け手の間の相互行為です。

それはスペンスさんの撮る、撮られる側の話にもありました。固定的ではなく、いつでも反転する。いつもひっくり返りながら他者理解と自己理解をして、そこにコミュニケーション力を生み出している。それがフォトセラピーのすごいところかなと思います。

**綾** もちろんジョー・スペンスや石内さんの作品は、並みの精神力では作れないと思います。でも1人だけでつくっているのかというとそうではなく、共同作業でできていると思います。それを自覚させる機械としてカメラというのはとてもいいと思います。

ただわたしが危惧しているのは、単純にアートが役に立つものかどうかということ、そんなに簡単ではないと思います。役に立つというところで収まりきらないようなところを引き受ける許容量がアートにはあると思います。

**播磨** これをすれば必ずよくなる、というのは危ないと思います。本当は役に立つかもしれないし、まったく無駄になるかもしれない。しかし、人間の生は何か無駄に見えるようなものが支えているということがおもうようにあります。

**質問者** 今、老人ホームで働いています。そこで暮らしている人はいつ亡くなるかわからないような状況の方もいます。暮らし自体にも悲壮感があります。世話する私たちがアートや写真を通してできることがあるか、どうかを聞きたいと思っています。

**綾** 私も高齢の方を対象にレクチャーをしたことがあります。それぞれの高齢の方に自分のファミリーアルバムから1枚、一番自分にとって大切な写真を持ってきていただいて、それについて話をしてもらおうワークショップを行いました。

だいたい60から70歳ぐらいまでですが、みなさん生き生きと少年少女時代の話をしたりしました。70歳の方が、15歳のときのことを、昨日のこのように話したときには本当にびっくりしました。

**播磨** 記憶というのは、その人の心の基礎です。でも聞いてくれる人が現れないと出てこないと思います。いい聞き手が現れると話がわき出てきます。そして記憶を共有することができます。聞き役が非常に重要です。そういうことを聞き書きで残しておくということもその人にとってはいいことだろうと思います。語ることによってものすごく生き生きとしてくる、そのことがケアにも影響を与えていると思います。

〔記憶と記録のつくり方〕連続講座 2007年3月6日、感興院にて



あや・ともか/大阪生まれ。大阪国際写真センターディレクターを勤めた後、1996年ギャラリー設立。石内都、ジョー・スペンス、ユージン&アイリーン・スミス、山沢栄子などを展覧。女性の表現に注目し、その仕事をおったビデオの制作やレクチャーも開催している。



はりま・やすお/アートと社会の新しい関係づくりに向け、「ABLE ART MOVEMENT」を提唱。現在、(財)たんぽぽの家理事長、(社)わたぼうしの会理事長、エイブル・アート・ジャパン常務理事、(特活)日本NPOセンター代表理事、日本ボランティア学会副代表など。

# 人生の記録『私の手』

## —高齢者施設におけるワークショップ—

天野 多佳子 ディレクター/Port Gallery T

私たちは、目に見えることが全てではないと知りながら、目に見えないものを想像したり、自分以外の誰かに思いをよせることを、つい後回しにしてしまうところがあります。「よく見ること、想像すること」というアートの作用は、社会で起こる問題を、なめらかにほぐしたり、場合によっては打ち砕くだけの力があります。その力は、多くの人が考えている以上にストレートです。だからこそアートは社会と離れたものではなく、なにがしかの方法を提示する手段になり得ると思うのです。

ここで紹介する取り組みも、ケアの現場にカメラを持ち込む新しい試みのひとつでした。



このたび手の撮影をきっかけに、かけがえのない一人ひとりの生に思いをよせるプログラムを開催しました。協力いただいたのは高齢者の入居施設です。実はこの試み、「記憶と記録」をテーマに高齢者のライフヒストリー（人生の物語）に着目した研究の一環で、彩都メディア図書館は、「写真」を使った実践的な方法を提案することでした。図書館では、「何を表現したいのか」といった自己のテーマ探しを軸にした独自のカリキュラム「写真表現大学」を運営し、今年で開講19年目を迎えます。自分の内面を探求するということは、時代や社会へ目を向けることでもあります。毎年、受講生の多くが「写真」という手段を持つことで、社会との向き合い方や、自分なりの生きる知恵のようなものを発見していきます。少し大袈裟に聞こえるかもしれませんが、これはかつて受講生だった私の実感でもあります。そこで、写真表現大学講師でもあるサードギャラリーAyaディレクターの綾智佳氏、同じく講師で写真家の天野憲一氏のアドバイスを頂き、プログラムの監修を担当させていただきました。プログラムでは、かけがえのない「人生」を中心にしました。参加いただく高齢者の方一人ひとりの人生そのものが主役であって欲しかったのです。そこで、生きてきた時間が刻み込まれた「手」を人生に見立てて撮影することで、目に見えないものへ思いをよせることを目的にしました。

また、できるかぎりやさしい方法で行うことを重視しました。特別な知識や機材がなければできないプログラムではなく「誰でもが取り組めること」。私たちが準備した基本的なものは①デジタルカメラ（一般的に最も使われている

コンパクトなもの）②布（手を置くために）③お菓子の空き箱や分厚い本（カメラや肘を乗せてブレ防止）④窓辺（自然の光がさしこむような）。以上、複雑なものは特にありません。もちろんカメラの機能的なコツもお伝えしましたが、まずは手の様々な表情を発見しながら、撮影の時間そのものを楽しむことを大切にしました。そして、この撮影プロセスが普段とは違うコミュニケーションを生むきっかけになり、会話が紡がれたならば、その言葉は、ケアに関わる人（今回は私たち主催者）が丁寧に記録しようと考えました。

「きれいな手に写してね。80年のしわくちやの手なの」「苦勞してきたような、一生懸命生きてきた証が出ています」「あらためて愛しいような気がします」「シミも記念のうちだから」…。ワークショップの会場には、しみこんでいくような言葉があふれました。そして、デジタルカメラの「押せば写る」「すぐ見れる」という機能が太に力を発揮したのです。手のモデルとして参加いただいた高齢者の皆さんが、次々に撮影する側にもチャレンジ。気付いたことを言葉にしなが



ら、自分以外の方へも関心を繋いでいく。カメラが、発見だけでなく、コミュニケーションの道具でもあることを実感しました。そしてプログラムの最後は「共有」というステップとして、手の写真と紡がれた言葉の展示を行い、あらためて目に見えないものへ思いをめぐらせる機会としました。今回参加させていただいたことで強く感じたのは、アートをアートの中だけに留めることなく、分野を超えて総合的に組み込んでいくことの可能性や、積み重ねていく重要性です。そうした試みの一つに、一緒になってチャレンジして下さった社会福祉法人 大阪キリスト教女子青年福祉会 シャロン千里・シルバーハウジングの皆様へ、感謝しています。



あまの・たかこ/NPO法人彩都メディア図書館の学芸員として在職中、2006年に高齢者施設において「手」をモチーフにした写真のワークショップをコーディネート。現在ディレクターとして展示会やアートプログラムの企画に携わり、07年秋にPort Gallery Tを開設。

このプログラムは、「『記憶』と『記録』の作り方」についての実践と研究（2005年度財団法人在宅医療助成 勇美記念財団）の一環として行いました。主催：財団法人たんぼの家、協力：アートミーツケア学会、彩都メディア図書館、写真表現大学

# 勇崎哲史『大神島 記憶の家族』に寄せる

鳥海 直美 千里金葉大学人間社会学部講師/社会福祉士



## 不在という現象の〈死〉

島のコミュニティセンターで幻燈会を行った。スライドが変わるたびに、ざわめきやため息、やがて歓声や話が弾み、映し出す光景は30枚にも満たないのだが、2時間近くの上映になる。Mちゃんの姿が映し出された時、アカウのおばさんは名を呼んで泣き出した。そして、スムカフのおばさんは、前に歩きだし、映し出された少年の顔を確かめるように何度もやさしく撫でた。銀幕になった寝具のシーツは柔らかく揺れ、Mちゃんの顔が一瞬笑ったように見えた<sup>1)</sup>。

1972年の家族の肖像と、1992年の家族の肖像が並置されたときに召喚されるのは、不在という現象の〈死〉である。喪われた者への哀惜が意図されたものではなく、大神島で出会った23組の家族を記憶しようとする写真家の意志と、写真家が統制し得なかった20年という時間の偶然性とが交わり経験された〈死〉である。

冒頭で引用したMちゃんは幼くして病死し、1992年の写真に画像を結ぶことをしない。在りし日のMちゃんのスライドに歩み寄るおばあさんに家族はなく、Mちゃんとも血縁関係にないが、島の子どもたちは「分け隔てなくみんな育てられる」ので、その〈死〉もまた島の人々のあいだで共有される。

## 〈生〉の記憶を支える

アフリカのある部族の風習によれば、死者が真の死者になるのは、死者の生前を記憶する人が死に絶えてしまったときであるという<sup>2)</sup>。この言い回しによれば、〈死〉は自己のみに属するものではなく、自己と他者とのあいだにある。また、死ぬことと死なれることは分かち難く経験され、死なれる側の記憶にとどまっている限りは死んだことにならない。

島を離れる勇崎哲史は、「自分たちのあるがままを、人知れずつづけてゆく孤高なる人々」を記憶しようと写真を撮る。再訪した際、はからずも幾つかの〈死〉を経験することになり、写真家として他者の〈生〉の記憶を支える者となる。

「すべての写真は潜在的な遺影である<sup>3)</sup>」といわれるとおり、『大神島 記憶の家族』は写真の本質を忠実なまでに具現化した作品である。また、人の記憶を外在化する写真は、記憶する行為そのものを支えるという点で、〈死〉をめぐる人間の経験に大きく関与してきた。そのことを冒頭のエピソードが如実に語っている。

## 記憶の家族

しかしながら、日常生活のなかで〈死〉が忌避されるようになって久しい。また、家族の関係が生きづらく、コミュニティの茫漠化が進むばかりである。このようななかで、本人の生活のなかに〈死〉を取り戻そうとするケア実践や、家族やコミュニティのつながりを回復しようとするケア実践がみられつつある。ここでは、取ってそれらに立ち入ることをしないで、作家のまなざしから別様の手がかりを得たい。

重ねて撮られた家族の肖像は、その背後の住まいと一体になってむせかえるほどの生活感を醸し出し、安易なノスタルジーや感傷を封じ込める力をもつ。いずれの家族の表情にも、共同生活を営むことに付随するいっさいを分かち合うことの潔さが漂い、そのような関係を引き合わせる磁力として高齢者が存在する。島での過酷な生活を神話的整理に沿って生き抜いてきた経験が、高齢者の存在をこのように象るにちがいない。

家族やコミュニティという関係性概念を、実体のままにとらえることは難しく、盲信的な過大評価と、認められた過小評価の両極に偏って描かれることが多い。しかし、作家は島の人々との出会いを丁寧に重ねることによって、その両極に引きずられることを回避している。

## 引用文献

- 1) 勇崎 哲史『大神島 記憶の家族』平凡社、1992年『アカウとは【東の】という意、スムカフは【下庭のちいさな畑】という意であり、いずれも家族の屋号』
- 2) 2007年1月21日付、朝日新聞朝刊、天声人語
- 3) 池田 幸『写真の覚悟 イメージの人類学』『現代思想』29(11)、92、2001
- 4) 神谷 美恵子『与える人と与えられる人』『存在の重み』みすず書房、1981
- 5) 岡崎 野『写真の力』『現代思想』29(11)、153、2001

## 大神島から遠く離れて

地図を広げて測る地理的距離よりも、大神島から随分と遠く離れたところにいるような気がする。たとえば、日常生活のなかで高齢者と出会うことが難しい。また、家族やコミュニティの力が低下したことが重ねて指摘されている。ふと、自問する。ケアにかかわる制度的基盤が整備されることにより、高齢者と出会う機会すらもシステムのなかに回収されているのではないか。共同のうちに担ってきたケアという営みが専門職の手に委ねられることによって、家族やコミュニティから共同性が喪われ、それらの解体に拍車をかけているのではないか。

一方で、大神島からそう遠くにいるはずがないとも思う。大神島の生活様式がかけがえのないように、個人の生活様式もひとつとして同じものはない。また、〈死〉に晒されながらも幸福なく（生）を希求するという点においては同じである。

作家によれば、「もし僕たちに失ったものがあるとすれば、それは自然の中で生きてきた人たちが抱いた“おそれ”と“折り”の気持ちではないだろうか」とされる。幼子の病死や、台風によるババアの全滅など、生に付随する偶然の出来事を受容していく力を、沖縄の生活観や死生観のなかに見出していることである。

## 偶然性のなかに生きる

ケアもまた偶然性から逃れられない。精神科医の神谷美恵子は、「他人を真の意味で援ける」ことに懐疑を抱きつつ、「自分の存在が他の人の何かの力になりうるような事態」は、人為を超えた偶然の出会いによってもたらされると指摘する<sup>4)</sup>。

ケアされる事態を積極的に選ぶ人はいない。ケアする人もまた出会いを選ぶことができない。偶然に出会ってしまった地点から、ケアという関係のなかに互いが巻き込まれていくことで、生活のなかに偶然に表出される病や別離や死に意味を与えていく。つまり、ケアとは、偶然にもたらされる不条理に晒されながらも、他者とのあいだに存在し、自らの〈生〉を生きていることを手放さない意志のあらわれである。

## 光の明るみに出されるもの

「人間社会を成立させている約束事」として家族やコミュニティがある。また、そのような約束事と、ひとりの人の生死に根ざしたものの見方がせめぎあう場所としてケアの現場がある。

このようなケアの現場に、大神島の家族の肖像を引き寄せてみれば、他者を煩わせることが無条件に成立する家族という関係の稀有なことで、煩わしいがゆえの関係の脆さが同時に汲み取れる。

最後に、在野の思想家・岡崎野による写真論を引用することによって、勇崎哲史の写真の核心に触れたい。できれば、これらの写真群と同じように、眩しい光に晒されながら。

日常的な生存の妄執に憑かれた人間にとっては、一切のノモス（人間社会を成立させている約束事）的なものはかけがえのない仕切りである。それは、自然の偶然性と暴力に抗して築かれ、人間をしっかりと庇護してくれる城壁のようなものだ。だが写真はノモス的なものを改めて自然の光の下に置き、そのもろさ、危うさ、はかなさを明るみに出すことができる。…写真のひとつの可能性は存在に対する殆ど古代人のような謙虚さを現代人に教えることなのである<sup>5)</sup>



とりうみ・なおみ/NPO法人地域生活サポートネットほうぶ副代表。障害をもつ子どもの地域生活支援実践や福祉教育の推進にソーシャルワーカーとしてかかわる。いのちの脆さと逞しさとが露呈されるケアという営みと、ケアを必要とする障害児者・高齢者を地域社会で支えるための方法に関心を抱く。

# ブランドビジネスへの挑戦「みっくすさいだー」

終 伸 江

「みっくすさいだー」は、神戸芸術工科大学ファッションデザイン学科の教員と学生、知的障害をもつ青年が互いに協力し合い活動するデザイングループとして2006年3月に結成されました。ブランド名でもある「みっくすさいだー」は、社会の枠にはまらない独自の思想の持ち主とされるoutsider（アウトサイダー）たちの感性をデザインにmix（ミックス＝混ぜ合わせる）する、という意味が込められた造語です。



みっくすさいだーのメンバー

「みっくすさいだー」誕生のきっかけは、同大学・見寺貞子教授を中心に行われている「even art project（イーブン・アート・プロジェクト）」でした。「even（イーブン）」とは「平らな」とか「対等の」という意味を持つキーワード。国籍や性別、年齢や性格など様々な違いを個性と捉え、違いを尊重し合い、互いにevenな関係を築くためのデザイングループとして設立されました。evenというキーワードを通し、ファッションやテキストなどに関連したユニバーサルデザインの提案を行っており、その活動の一つとして、障害のある人のアートの商品化に取り組むことになりました。

知的障害を持つ人々の中には、言葉や表情では表しにくい自己表現を、絵の中で積極的に行う人が少なくありません。私達が出会った中村君（神戸市在住・20歳）も絵で自分を表現するその一人でした。彼の絵は可愛くてもしるくどこかユーモラスで、彼の個性や存在感を強く感じさせます。彼にとって絵を描くことは、とても重要な自己表現の手段であることがわかります。中村君に出来ることと私達に出来ることをうまく結びつけば新しい何かが出来るとは思いませんが、そんな可能性を感じた瞬間でした。まず私達は、中村君の描いたたくさんの動物の絵の中から約50種類のモチーフを選びスキャニングをし、コンピューターでカラーやレイアウトなどのデザイン処理を行いました。作成した原画をもとにシルクスクリーン印刷技法で生地を捺染をし、幅約114cm、長さ約280cmのタペストリーを制作しました。また、商品化サンプルとしてかばんやポーチ、クッションカバーなども制作しました。これらは2006年3月30日～4月2日、原田の森美術館（兵庫県神戸市）で開催された「CANNOW2006」で展示を行いました。展示をご覧になったお客様からは実際に商品を購入したいという声を数多くいただき、ビジネスモデルへの発展の可能性を強く意識したきっかけとなりました。

その後、新たなデザインシリーズを追加し、2006年夏に「ドラフト!5」に応募しました。「ドラフト!5」とは、今後のファッション産業を担う若手クリエイターの育成を図るため、若手クリエイターが企画したデザインや商品を、地元神戸を含めた有力セレクトショップが買い取り条件で売場デビューさせる目的で開催しているデザインコンペです。最終審査会では各ショップのバイヤーを対象に展示会形式でプレゼンテーションを行いました。「みっくすさいだー」はかばんの企画が採用となり、大丸とon the couch（オン・ザ・カウチ）の2社から2007年春夏に売場デビューを果たしました。

## みっくすさいだー発売情報

<2007年3月14日より12月末まで発売中>  
大丸（神戸店、梅田店、心斎橋店、京都店、東京店、札幌店、インターネットWebショップ）

「みっくすさいだー」のデザインは、独創性の高い柄と明るい配色、見る人を笑顔にさせる楽しいデザインが特徴です。これは中村君と学生、教員のそれぞれの感性が混ざり合い生まれたデザインで、互いの力を出し合い、evenな関係で作り上げたデザインでした。落書きのまま埋もれていた絵が、デザインという付加価値をつけることで商品として生まれ変わる。私はこの活動を通して、福祉社会におけるデザイナーの必要性を痛感しました。ともすれば家電製品までもがおしゃれにデザインされている昨今、デザインの飽和状態が起こっているのではないかと恐れがちです。しかし、福祉というフィールドに目を向けてみると、デザインという概念すらないのが現状です。私達デザイナーは、デザイナーとして出来ることがまだまだ無限にあるのではないのでしょうか。今後のデザイン教育の課題として、福祉とデザインの取り組みは重要であると考えます。「みっくすさいだー」の活動は、教育・福祉・ビジネスが結びついた具体的事例であり、社会的にも大きな意味のある活動です。障害をもつ人々の自立支援として、ロイヤリティーの還元を含めたビジネスモデルの構築を目指したいと考えています。

「みっくすさいだー」の挑戦は始まったばかりです。今後は、新しいデザインをどんどん企画し、明るく楽しいデザインを世の中に提案していきたいと考えています。デザインで勝負できるブランドとして「みっくすさいだー」を成長させていくことが目標です。



ドラフト!5最終審査会の様子



on the couchで商品化されたトートバッグ

大丸で商品化されたブックバッグ

【みっくすさいだーに関するお問い合わせ】みっくすさいだー代表：終 伸 江  
info@mixsider.com http://mixsider.com



ひいらぎのぶえ／神戸芸術工科大学ファッションデザイン学科卒業。卒業後、株式会社ワコールで下着のボタンナー、デザイナーを経験。退職後、母校である神戸芸術工科大学に戻り、研究助手として4年間教職に従事。現在はフリーランスでデザインや制作、研究活動を行う。

# アートはこころの“クスリ”②

## 「NPO法人アーツプロジェクト」の誕生

森口 ゆたか 造形作家/NPO法人アーツプロジェクト代表

イギリスでの2年間の滞在中に偶然関わることになった病院や福祉施設でアートを生かしてゆくこの活動を、何とか日本に持ち帰りたく日本の方々にも知って貰いたいと思っていた私だったが、イギリスで妊娠し大きなお腹を抱えての帰国となり、出産後すぐに活動することは至難の業であった。その私の思いをパートナーとして支え、NPO法人という正式な団体まで作り上げてくれたのが前代表の岩尾啓子であった。彼女は会社経営の傍ら様々な所でボランティア活動を長年にわたり行ってきた人で、幅広い人脈を生かして様々な人達に病院でのアートの必要性を説いて廻ってくれた。



その呼びかけに最初に反応してくださったのが、当時大規模な病院改修工事の終盤を迎えられていた尼崎市にある関西労災病院であった。当時の早川徹院長先生（現名誉院長）と奥副院長先生（現院長）は、私達女性2人のイギリスでの経験とそれを何とか日本でも実現したいという熱い思いを、病院のスタッフ、事務方をも全員招集して懇親会まで設けて真剣に耳を傾けて下さった。今から思えばNPOにすらなっていなかった私達をよくここまで信頼して下さったことと感謝の気持ちで一杯になる。まず依頼を受けたのは小児科外来の待合スペースで脳神経外科の奥に位置するので、子供達や親御さんがややもすると通りやすく感じられるかも知れない、この通路をより通りやすくそして奥に小児科があることをアートで伝えることはできないか？そして何よりも長い待ち時間に子供達が退屈したりすることのないように少しでも楽しい空間に変えられないか？という要望であった。小児科の外来や入院棟によく見られるのは、看護師さんや保育士さんの手による アンパンマンやミッキーマウスなどのキャラクターや保育園などに見られるお花や動物だが、せっかくアーツプロジェクトが関わらせて頂くのだから、もっとアートとしてグレードの高いものを提供しようということになった。父も母も私も美術に携わる仕事をしており特に関西で活躍している作家には知り合いが多いので、アーティストの選出に問題はなかった。

有名な抽象画家で絵本作家としても「よるの ようちえん」で第17回ブラチスラバ世界絵本原画展でグランプリを受賞されていた中辻悦子氏は私達の草の根的な活動の趣旨をよく理解し応援してくださっていたので迷わずお願いすることにした。小児科外来の待合部分、特にキッズコーナー

を中心として前述の絵本に登場する「おっとさん」「すっとさん」「ばっとさん」などの中辻ワールドの不思議な可愛らしいお化けがレリーフとなって小児科の壁面や壁に設置された。脳神経外科からもこれらの妖精ともお化けとも見える微笑みを誘うキャラクター達が手招きをしているの見えるので小さい子供達は自然と足がそちらの方へと向かうというアートによる導線を作った。出来上がったものを見に何回も足を運んだが、最も感激したのは、入院されているお年寄りが病院に素晴らしい場所があると聞いて、車椅子を動かして入院棟から降りて来られたことだった。まあ何となくいい感じ！と目を輝かせて見入ってくださっていた姿が忘れられない。作家は画廊や美術館で作品が評価されるのも当然嬉しいだろうが、自らが手がけた仕事が身体や心を病んだ人々の精神を高揚させ再生へのきっかけとなれば、正に作家冥利につきるのではないだろうか？このように優れた芸術作品が結果として人々の心の糧となることは理想的だと思うが、反対に「これは癒しの絵画です。」と全面に押しつけるような作品は個人的には共鳴できない。私達の活動をインターネットや新聞などで知り売り込んでくれる癒し系？アーティストもいるが全てお断りしている。

関西労災病院という規模の大きな総合病院から最初の仕事を頂いたことをきっかけに他の病院からも少しずつ仕事の依頼がくるようになってきた。2004年の暮れ岩尾は取り憑かれたようにこの活動を正式なNPO法人にせねばならぬと奔走してまわった。その為に必要な人材も集めるとにかく組織として成立できるようにした。先矢、翌年の1月にもかく私にバトンを渡すかの如く脳梗塞で倒れ僅か5日目に帰らぬ人となってしまった。人を愛し芸術を愛し、ホスピタルアートを日本の津々浦々にまで届けることに残りの人生を傾けるつもりであった彼女の意志を私に残されたメンバーが受け継ぐこととなった。



た。2004年の暮れ岩尾は取り憑かれたようにこの活動を正式なNPO法人にせねばならぬと奔走してまわった。その為に必要な人材も集めるとにかく組織として成立できるようにした。先矢、翌年の1月にもかく私にバトンを渡すかの如く脳梗塞で倒れ僅か5日目に帰らぬ人となってしまった。人を愛し芸術を愛し、ホスピタルアートを日本の津々浦々にまで届けることに残りの人生を傾けるつもりであった彼女の意志を私に残されたメンバーが受け継ぐこととなった。



もりぐち・ゆたか／造形作家として発表を続ける一方、芸術療法とは異なる医療と芸術の関りに可能性を見出し、アートの力で医療現場をより癒しの空間とすることを目的とするアーツプロジェクトを立ち上げる。

## シリーズ アートとNPO

### 消費されない自由への触媒

宮嶋 一男 NPO法人芸術環境計画(ART POT) 理事長

2007年4月、私たちは、伊丹市・(財)伊丹市文化振興財団との共催で、韓国金属工芸並びに造形作家である劉里知（ユ・リジ）さんの骨董をはじめとした贈送まつわる作品展を、伊丹市立工芸センターにて開催。同時に「葬送と美から、いのちの現在へ」と題した公開シンポジウムを実施し、いま死者や死について想いを至らせることの大切さを語りあった。経済合理性のみを追求してきた社会では、死や死者はまさに不合理、無意味なものではない。「なぜ人を殺してはいけないの？」という問いは、裏返しとして、自分を含む現在の生そのものの無意味さ（「どうせ死ぬば同じじゃん」）を語っている。

死や死者との関係性が希薄になれば、生は貧しくなる。葬送儀礼にまつわる作品の展示会などおそろしくこれまでになかったと思うが、これが触媒となり、今日の生の、いのちの在り様を考えるきっかけになればと企画したものである。

アートは、身体（五感）を通して、人間は自由であることの想像力を触発

する媒体、触媒だと考えている。ここでいう自由とは、時代・社会の支配的な制度や価値観からの自由、自発的・自律的な自由である。人間はつねに、死者や未来からくる者も含む他者（人間に限らないし、自分がいま在る社会、世界といってもいい）との関係性の中で生きている。その関係性を内面化している私たちが自由でありうるためには、関係を打ち消すのではなく、他者をも自由な主体として関係を結び直す必要がある。アートが力を持つとすれば、私たちのうちにある他者の関係性を掘り動かすような作品あるいは制作行為を通して、自己の自由について問い直す機会が与えられることであろう。迂遠かもしれないが、多くの人たちがアートの力を体験することで、社会は確実に変わっていくと信じている。いや、信じたいし、自身が自由になりたいから、どうしたらより力ある体験の機会を生み出せるか、模索の最中です。

展示会の記録とシンポジウムの記録をご希望の方に¥1,200（送料込み）でお届けします。お申し込みは npo@artpot.netまで



みやじま・かずお／広告の企画制作を仕事としつつも、アートを手掛かりに社会を変えていきたいと、2008年にNPO法人を設立。これまでに折元立身氏や視覚障害のある盲点造形作家によるワークショップ、診療所のアート計画などに携わる。



# アートミーツケア学会 入会のご案内

## 会員を募集しています

人間の生命、ケアにおけるアートの役割を研究する場として、またアートの力を社会にいかしていくためのネットワークとして、2006年に設立しました。アートミーツケア学会では、趣旨に賛同する会員による活動基盤をつくりたいと考えています。多くの方々に賛同、支援をいただき、学会を支えていただけることを願います。ぜひ、入会し、研究や活動にご参加ください。

## 事業案内

### 1. 大会の開催

講演、研究発表、実践報告を実施し、学会員による発表、討論の場を設けるとともに、会員相互の情報交換、交流の場として年1回大会を開催します。

### 2. 調査研究の推進

「医療とアート」「高齢者とアート」「障害と創造性」「アート・テクノロジー・ケア」など、アートとケアに関する調査研究を推進します。

### 3. 学会誌の発行

アートとケアに関する研究論文や調査報告、実践紹介、エッセイ、評論などを掲載した学会誌を発行します。

### 4. ニュースレターの発行

日本や海外における新しい情報を掲載したニュースレターを発行します。

### 5. フォーラム、シンポジウムの開催

特定のテーマ、タイムリーな課題についてのフォーラムやシンポジウムを開催します。

### 6. プログラムの開発、プロジェクトの実施

ケアの現場へのアーティストの派遣、アート作品の導入、プログラムの開発などを推進します。

### 7. 国際交流の推進

アートとケアに携わる団体と共同研究を実施します。また、情報交換、交流事業を実施し、アートとケアに関わる国際的なネットワークの形成をめざします。

## 会員種類・年会費

- 個人会員 一般10,000円 学生5,000円
- 賛助会員 30,000円

## 申し込み方法

1. 郵便振替にて年会費をご入金ください。  
入金先 アートミーツケア学会  
口座番号 00920-4-252135
2. 入会申込書に必要事項を記入のうえ、年会費の払込票（コピー可）をそえて事務局までお送りください。
3. 事務局より入会手続き完了のお知らせを返送いたします。

## 役員（敬称略）

- 会長 鷲田清一（大阪大学総長）
- 副会長 畑 祥雄（関西学院大学教授）
- 常務理事 播磨靖夫（財団法人たんぼぼの家理事長）
- 理事 秋田光彦（浄土宗大蓮寺・應典院住職）
- 理事 片井 修（京都大学情報学研究所教授）
- 理事 グロッセ世津子（有限会社みどりのゆび代表）
- 理事 塩瀬隆之（京都大学大学院情報学研究所助教）
- 理事 関口怜子（ハート&アート空間Be-1代表）
- 理事 ブルース・ダーリング（九州保健福祉大学教授）
- 理事 銅金裕司（メディアアーティスト）
- 理事 鳥海直美（千里金蘭大学人間社会学部講師/社会福祉士）
- 理事 中川 真（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
- 理事 並河恵美子（NPO法人芸術資源開発機構代表）
- 理事 本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター大学院文学研究科准教授）
- 理事 的場政樹（医療法人直志会袋田病院院長）
- 理事 見寺貞子（神戸芸術工科大学教授）
- 理事 森口ゆたか（NPO法人アーツ・プロジェクト代表）
- 理事 森田ゆかり（金城大学短期大学部講師）
- 理事 山口悦子（大阪市立大学大学院医学研究科発達小児医学病院長講師）
- 理事 横川善正（金沢美術工芸大学教授）
- 監事 太田好泰 エイブル・アート・ジャパン事務局長
- 監事 三浦久子 株式会社エイジレスラボラトリー会長

## 募集しています！

- ボランティア募集  
事務局では、ホームページの運営やニュースレターの編集や取材などに協力いただける方を募集しています。興味のある方はご連絡を。
- この他、ニュースレターで取り上げてほしい特集や記事などについて事務局までご意見をお寄せ下さい。お待ちしております。

## アートミーツケア学会ニュースレター

Vol.2 2007年11月30日発行

発行 アートミーツケア学会  
〒630-8044 奈良市六条西3-25-4 財団法人たんぼぼの案内  
Tel.0742-43-7055 Fax.0742-49-5501  
E-mail.art-care@popo.or.jp  
<http://artmeetscare.seesaa.net/>